

二〇〇一年二月八日発題記録

「相互参究」を

相互参究する(前半)

(発題者—江尻祥晃)

参加者—TK・OC・OY・HR・YM・江尻

相国寺山内林光院にて

江尻「それでは発題をさせていただき
ます。相互参究についてということ
今日は皆さんと真剣な話し合いが
できればと思っています。FAS協会に
おきましては基本的公案と相互参究、
この二つは二本柱と言いますか、二つの
非常に大事なものとされてきました。
これまで私は自分の発題において基
本的公案とは何かということは何回か
やってきましたが、今日はもう一つの
柱である相互参究というものについて
ここで参究しあえたらと思います。ま
ず、相互参究の相互とは何を指すの
かということが一つあると思います。も
う一つは、その相互が参究するとい
う場合、一体何を参究するのかとい
うことが大事な問題になってくると思
います。まずは今日ご出席いただいた
方々にこの二つの問い、相互参究の相
互とは何か、一体何を参究するのか
ということをお聞きしたいと思います。比

較的参加されて間もないということ
でYMさんからお願ひします。」

YM「私は一番何も知らないという
か、極めて一般的な印象ということ
になると思います。まずこの相互参究
というのは、私が久松先生の本を
読んで、これは学道道場なりFAS協
会をリードされる中で久松先生が
提示された独自の修行の方法論だ
ろうということなんでしょう。なぜ
それが独自かと言うと、僕の想像
では多分、伝統的な禅の修行の
スタイルに対するアンチテーゼと
して出してこられたんだろうとい
うことですね。僕のイメージだと
一般的な修行においては禅マスター
(老師)がおられてその方へ向か
って参禅するというスタイルが多
いという印象を受けているんです
けれど、お師匠さんとお弟子さん
という関係ではなくて、修行する
人達一人一人が対等というか、主
体性を重視するということか、そ
ういう感じでマスターと弟子とい
う関係を取り払って、対等な、共
に修行する主体性を認め合うとい
うのかなあ、そういう形で置き換
えたものじゃないかなあと思うん
です。ただ私は相互というのが一
対一ということの意味なのか、そ
れとももっとより複数の人を意
味するのか、そのこ

ところが今一つ分からないんです。
一対一に限定するのかしないのか
ということですね。次に参究の方
ですけれども、これは伝統的な
スタイルに対するアンチテーゼと
するならば、何千もあるという
公案を与えて、その公案に対する
工夫の結果を老師が聞くと、
それが師と弟子の間で行われる
参禅のスタイルであるとする
ならば、久松さんがめざしてお
られるのは、そういう伝統的な
公案を見るところではないわけ
ですから、そういうことにと
らわれない相互の参究というの
を意味していると思うんです。
伝統的な禅の修行のスタイル
である参禅方式に対する一種の
アンチテーゼであり、新たな
提案ですね。革新的なもの、
禅の現代化といえますか、
そういうことが久松先生の
新しい提案だったんだろう
と思うんです。これは概念的
な印象なんでしょう。ただ
一つ疑問がありますね。学
道道場なりFAS協会に
参加した人は、そう言っても
久松真一という人に、この
人格に引かれてというのか、
久松先生に向かつて修行
するとか教えを乞うとか、
久松先生に弟子入りする
ような気持ちがあったん
じゃないかと思像するん
です。やはり精神的な
営みですから、
そういうものを
体現している
人格という

ものを抜きにしては考えにくい
と思うんです。まして
当時は若い学生さん
んか中心になって
やっていたという
ことになる、
やはり久松先生
あつての修行とい
いますか、参禅とい
うことがあつた
と思うんです。
そうするとその
人達は相互参究
してたんじゃなく
て久松先生に参
禅していたとい
うことじゃない
かと思うんです。
そうしますと、
久松先生がご自
分がお元気な時
に、若い時から、
学道道場におい
ては相互参究を
しなさいと言っ
ていたとすると、
私はその経緯を
知りませんから
どうでしょうか。
久松先生が健在
な時は先生を慕
って先生に参禅
するような気持
ちというか、
そういうことを
やっていたけれど
も、久松先生自
身としては自分
なき後、道人た
ちの修行のあり
方というのに思
いをいたした時
に、その後どう
するかという指
針を示そうと
されたんじゃない
かと思像するん
です。そうす
ると、私(久松)
というマスター
に対して皆さん
参禅するとい
う人一人が互
いに切磋琢磨
するとい
う方式でも
つて自分な
き後の道場
がまず
まず発展
するよう
励んで
ください
という
気持ち
があつ
たんじ
ゃない
かと思
うん
です。
これは
例えば
イエス
なき
後の
弟子
達の
問題
とか
共通
する
ところ
が

ある。避けがたい大問題だと思っ
すね。私は全く知らないで勝手なこ
を言っているけれども、何かそういう
非常にきわどいというか、難しい問題
を久松さんが考えていたんじゃないか
と、自分なき後の道人達の修行はかく
あれということですね。そういう感じ
が強いんですけども。今のところそ
ういう概念的なことですみません。」

江尻「HRさんいかがでしょうか。」

HR「私は自己究明というか、自己の
真の姿というのを究明すると、それは
FASのF（無相の自己）というもの
に対してどう自分が考えるか、それは
人それぞれ考え方がありますが、そ
れをお互いに深く掘り下げて、無相
の自己というものを究明する。私は無
相の自己というのは自己の生命力とい
うか、生きるいのちの元力（もとぢか
ら）的な考えをもっております。以上
です。」

江尻「もう一度確認させていただきま
す。相互参究の相互というのは生きる
いのちの元力と私との相互というふう
に捉えるということですか。」

HR「いや、相互というのはお互い人

間として自己の究明の中で、無相の自
己についてのいろいろな考えがあるか
ら、それについてお互いが話すこと
によって自己を掘り下げていくとい
うことです。」

江尻「相互というのは他者と私とい
うことですね。」

HR「そう、他者と私です。他者に対
しては、自分というものを他者におい
て分かれるということがありますし、他
者とはぜんぜん違うと、己（おのれ）
は己なんだというところに生き方の問
題もあると思うんです。それをお互い
に、同じ問題を話すことによって深
く無相の自己に参じていく。」

江尻「相互参究の相互というのは自分
と他者のことである。そういう相互で
あるということなんです、それとは
違う相互というものはないんでしょ
うか。例えばHRさんと私とは他者同士
ですね。全く生まれた環境も違うし考
え方も違うでしょうし、そういう他者
同士が、その相互が一体何を参究す
るのか。HRさんからすれば私（江尻）
とは一体何者なのかということ、他
者としての江尻を参究していくとい
うことになるのでしょうか。逆に私から

すればHRさんという他者を、どうい
うことを考えている人なのかというこ
とを参究していくということになるん
でしょうか。そんなふうを考えていく
と難しいですね。OYさんがでしょ
うか。」

OY「私は前にも書いたことがあるの
ですが、相互ということになると他人
との相互ということになると思っ
ます。けれども、久松先生が言う相互
というのは、当然それも相互と言っ
ておられるんですが、少なくとも本来の
私との相互、自分と本来の自分との相
互ということを重要視しておられると
思う。私と本来の私というものの相互
間の参究。本来の私に参じていくこと
を相互参究の第一義と言われたのだと
私は理解していますけど。だから他
人との相互参究も無視できないけれど
も、もう一つ、もっと重要なのは本
当の私との相互参究ということが根底に
あつて相互参究ということをお
られると思います。」

江尻「今の場合は、本当の私と現実の
私との間で相互ということが成り立つ
ということですね。しかし本来の私と
現実の私とが何を参究するんですか。
二人という言い方はおかしいかも知れ

ませんが、その相互で一体何を参究す
るんでしょう。」

OY「それは本来というものを参究す
るんです。本来の存在とはどういうも
のかということをお互いに参究する。他人との
参究の中で分かるということ以上に、
本来の自分じゃないと分からないぞ、
ということをお互いに分らないぞ、
んだと思います。本来が本来のものに
気づくんであつて、他人から言われて
気づくものじゃない。少なくともそ
啄同時という言葉を使っていたと思
います。親鳥がつつくんじゃなくて自分
が自分でつつくということがない限り
は参究にもならない。自分が自分で内
からつづいてはじめて殻が破れるん
であつて、親がつつくということは二
次、むしろ自分が自分でつつくとい
うことがない限りは殻なんか破れないぞ
という、そういうことが非常に重要な
ことだと言われていたと思いますね。」

江尻「今の場合でしたら、雛鳥とい
うか、卵の中からつづくものが現実の
私ですね。外から親鳥がつつくとい
うのが本来の自分ということになりま
すか。」

OY「いやいや、殻をかぶった本来と

いうひよこが内にあるのが卵で、卵の状態が普通の人間のあり方ですよ。普通の人間のあり方は卵。要するに殻を持つて本来の中身を持ったあり方が非本来的なあり方。本来じゃないあり方です。それが人間という存在。だけれど、卵は中身を持っていて、中身のひよこが本来、その本来が自分からついて出てくると、それが人間が人間になるということ。だから普通の人間存在は卵であって人間じゃないんですよ。人間が人間になるといのは、外からつつかれるということもあるけれども、自分でついて出てくる。出てきたものが本当の人間。そういうものだと思います。」

江尻「現実の自分と本来の自分との相互参究によって、この現実の自分が本来の自分になるといことですね。」

OX「人間が人間になるといことです。」

江尻「OXさんはいかがですか。」

OX「一人一人を波としますとね、みんな本来水なんだということお互い目覚め合うということだと思ふ。そういうことはいろんな人間が世界中いつ

でもどこでもやっているんだと、別に坐禅しなくても、参究しなくてもやっているんだと、それがまあ参究ということでしょうね。それで相互というのはいや相互の自己、みんなが水だといふ共通の自己があるから、俺と彼と相互ということになるけれどね、相互というのは後であって、相互が先にあって参究するんじゃない、僕ら

がみんな水だということが基盤なんです。本来そうなんだけれども、誰でも本来水なんですけれども、自覚的に意識的に参究しあうということは、修行の方法としてはあるわけですよ。しかし別に自覚しなくたってもう既に参究しあっているとも言える。僕は西田先生の言葉を思い出さずにはいられませんが、我があつて経験があるんじゃない、経験があつて我があるんだということがありますよ。だから参究ということがあつてはじめて相互ということがある。AとBとがいて、それが相互参究するというんじゃない、お互いが参究できる基盤というのは共通の自己。それがあつてから参究しあえる。本来みんな水なんだぞと云うことです。大ざっぱに言うところいうことだと思います。」

江尻「自分が何者かである、何かに依つ

ているということが他者との相互参究によつてはつきりするということを言われる人もいますよ。」「Kさんいかがでしょうか。」

K「久松先生との参究のことを先程Yさんとおっしゃいましたよね。久松先生との参究というのは、自分にとって他者との参究ではないという意識が非常に強いんです。というか、だからこそ久松先生と出会うという気持ちがあるんです。久松先生において自分の本来の姿を見たいというね、そういうものがあるからこそ久松先生がおっしゃっている相互参究ってどういうことなのかなあというのを教えてください。それは久松先生に向かつて相互参究しますなんてことは言えることじゃないですよ。私にとつては言えた柄じゃないわけですよ。けれどもそれにも関わらず先生が、これは相互参究なんですよとおっしゃると、本当にそうなんだなあ、そうでなければ久松先生との出会いというのはあり得ないんだと、そういう気持ちになりましたね、他にそういうことをおっしゃる方はいないですよ。ですから久松先生との出会いというものを通して先生が投げかけられた人間のあり方、基本的なあり方だということを受け止めることだ

と私は思っているんです。久松先生との出会いというか、久松先生に参究しに行きましたことは、お互いそれぞれにありますけれども、そういうことは別に誰も公表されません。公表しないですけれども、どういふことがあつたかということは、他の伝統的な僧堂もそうだと思いますけれども、公表しないのが原則ですね。何があつたかということは当人同士しか知らないわけですよ。知られているのは何気なしにお互いにやりとりする問答ですね、禅の先生と弟子という、二人や三人の間で自然に出てくる問答ですね、それで出てきたものを侍者とか誰かが記録してきて、そしてそれが我々に伝わってきているのが、まあ大体唐の時代の問答と云われるもの、自然な形でやりとりされているんですね。そうすると問いを発している者も、それから答えを發している者も……久松先生のおっしゃる基本的公案と言いますか、それを、問う方もそうですし答える方もそうですし、そこに出てくる問答というのが久松先生のおっしゃる相互参究ということなんだなあと思つてですね、問答を読んでいらっしゃるけれども、久松先生がおっしゃった事柄は、日本ではいろんな修行の中で非常に形式化してきた師と弟子との関係の中で……そう

いうことを促しておられる。大体私自身、相互参究ってどういうことか何にも分からなかったんですけども、久松先生の『相互参究について』という論文を英文に訳しましてね、訳したときに大変だったんですね。言葉は相互参究なんですけれども、英語に訳するときにお互いに参究するという訳ではダメなんです。そういう訳では久松先生のおっしゃっていることに届かない。お互いに自己に参究するという訳にしないと、この日本語は訳せないんですよ。先程皆さんも触れておられましたけれども、やはりそこで久松先生がおっしゃっているのは、真の自己と私との出会い、そこで真の自己に出会うというか、目覚めるというか、それが久松先生の言う師と弟子との出会いなんだということをおっしゃっている、師と弟子というのはお互いの自己だとおっしゃっているわけです。あの論文は本当にすぐれた論文で、私それを英語に訳して、オランダのティルテンベルグでその翻訳を紹介したんですね。みんなその文字に線を引いて何遍も何遍も繰り返し繰り返し読んでとても感動したと言っておられました。本当に私の拙い翻訳を通して、先生のお考えが少しでも伝わったという感じがしまして大変うれしかったです。それは

そういう深い目覚めの論理といいますが、論理というものがやはりある。それに触れたんだと思います。非常に論理的な方々が、久松先生の覚の論理というものに触れたという感じがしました。それで『相互参究について』という先生の一文というのは非常にすぐれたものだと思います。ですから江尻さんがこういうテーマについてお互いに我々の意見を出し合うという、出させてください、そして論じ合うという機会を持つことはとても大事なことなんです。私に聞きましたは、私自身は非常に貧弱な理解しか持っておりませんので、相互参究という何かお互いに自分の問題を相談し合うことだというふうに常識的に考えられやすいので、そういうことでずっと来ましたけれど、この翻訳をした時点からちよつと変わりました。ああ久松先生のお考えはこういうところにあっただんなあと。ですから最初に江尻さんが二本柱とおっしゃった。基本的公案と相互参究とは重要な二本柱とおっしゃったんですけども、私は考えは同じだと思えますけれども、二本柱ではなくて一つ。これは二つになったら大変です。成り立たない。どうしてもこれは一つでなければならぬ。基本的公案という何か個人的なイメージが

強くなって、無相の自己というのは個人的な自己というように聞こえてきがちなんですけれども、それは江尻さんもちよつと触れられましたけれど、本当に個人というところを抜けたところが基本的公案の世界だと思えます。それをお互いに究明し合うということで一応相互という言葉を使っている。歴史の過去現在未来というASというものを踏まえていると思えますね。相互参究ということは我々常識的な理解でもってすませてはいけません。ものすごく重要な問題だと思えますので、それをテーマにしてお互いに論じ合うことはとても大事なことで思いますが、それを安易に、お互いに参究し合うというふうにやっていくというと、単にお互いのバラバラの意見を持ち合うというだけのことになってしまいますね。ですから久松先生が相互参究についてということでご言っておられることをお互いがどう理解するかという、そこを一つ明らかにしていく必要があるんじゃないかと思えます。」

ね。他者的な久松先生がおられて、自分がその他者的な久松先生に参じている、普通はそういうふうに通じてしまっただけけれども、実は他者的な久松先生に参じているんじゃないか、言い方はおかしいかも知れませんが、久松先生を通して本来の自分に参じていると、そういうあり方で参じていくというのが本当の相互参究であるということですね。」

「A」それが理屈じゃなくてそうなっているんですね、久松先生の場合は。これがすごい、そうなっているということがね。ですから久松先生が書かれたものに我々が触れて、深く読んでいけばいくほど、私の本当の自己だなぁと思わざるを得ないような、そういうものが我々の目の前に活字となって現れてきますよね。そのところが久松先生の書いたものを読むという意味だろうと私は思いますけれどもね。」

「B」江尻さんよろしいか。今江尻さんが言ったように、他をして自己の究明をするというね、道元と言うならば万法に証せられるということ、そういう意味においてやはり人間というものは、他から自己を、自己の命を感じる、例えば木は春には生々と芽吹き、秋に

は葉落ちる。これをもつて自分の命、生死事大ということが分かる。同時に自己の命、本当の命を実感する。そこにFASが発露している。生活そのものが、今生きるといことが本来の自己の探求、自己を見るところという意味において僕は方法に証せられるということと思う。久松先生の書かれたものを

読む。また僕はFASに来させてもらって同じ場で一緒に坐る。ものすごく啓発を受ける。ということは、自己の実感から申し上げる。本来の自己というものをみんな忘れておる。それでしか生きられないのに、何とかこの自分にいいように、悪いことにならないようにと、それで生きておると思う。だからあくまでも自分なだけけれども人間というのはなかなか本来の自己を自ら覚するのは難しいと思う。」

OC「お釈迦様が開悟された時に草木国土悉皆成仏と言われた。つまり草木国土とも相互参究しているということを書いておられますね。相互というのは人間だけじゃないと、そういうことがここに書かれている。」

HR「他というものからということも僕は尊重してもらわなければいけないと思います。本来は自分で自分の殻を

破っていくというのが一番いい方法だけれども、それは難しい。人間というものにはそういうことにはなかなか難しい。本来の人間からそうでないとお互いの啓発もありませんし、他人によつて啓発される、そこに相互参究ということがあるんじゃないか。」

江尻「先程OCさんが結局久松先生と対するということが、他者的な久松先生じゃなくて、そこに本来の自分が対している、そこにいると思える、そういうふうの実感をもつて思えたということですね、久松先生の場合は。久松という他者じゃなくても本来の私なんだと、そこに現成しているのは。それを実感をもつて味わえるような方であつたと言われていたと思うんです。今回、相互参究の相互とは、参究とはということ、皆さん一人一人にお聞きしましたけれども、それで答えは出たようなものなんですけれども、普通一般的に相互と言ったら私とあなた、他者と自分、その間の相互というように受け取られていますよね。相互というのは自分と他者なんだと。それが複数であろうと一対一であろうと、そういう横のつながりの相互、それが普通の意味の相互ということになると思うんですけれども、もう一つ相互と言

えるものがあると思うんです。それはOCさんが言われたようなことなんですけれども、現実の私と本来の私、この間にも相互というのは成り立つわけです。それを縦の相互参究というふうに言った場合に、本来の私と現実の私とが相互参究する、それは非常に大事なことだと思わなければならない。現実の人間の在り方としてはどうかと考えた時に、現実の私というのは違う方向に、本来の私の方向じゃない方向に意識が飛んでいて、本来の自己に向かっているというのが現実の我々の在り方じゃないかなと思います。しかし本来の私から現実の私への突き上げ、呼びかけというのは常にあるわけなんです。それに対してこの現実の私から本来の私へという方向性はない場合が非常に多い。つまり一方通行なわけですね。本来の自分は絶えず今ここでこの現実の私に相互参究を呼びかけているんだけれども、この現実の私の方はその呼びかけに応じることなく別の方向を向いている。それが現実の私の在り方、普通一般の在り方じゃないかと思うわけです。しかし現実の自分が本来の自分の呼びかけ、突き上げに気づいて、この現実の自分が本来の自分に向けた時に相互ということが成り立つ

んじゃないか。縦の相互参究というのは本来の私からの呼びかけに素直に感じる、それができた時に始まる。そしてそれはまさに坐禅という姿に象徴されるんじゃないか。坐禅こそ本来の自分と現実の自分との相互参究の姿じゃないかというのが私の考えです。普通現実の自分というのは本来の自分からの突き上げを見ずに誤魔化そうとしているわけなんですけれども、どんなによそを向いていても突き上げてくるわけですから、本来の自分は私と相互参究しなさいと呼びかけてくるわけですから、始めは一方通行の、本来の自分からの呼びかけなんですけれども、この現実の私とその呼びかけに応じて本来の自己の方を真正面から見た時に本当の相互参究が始まる。それがまさしく坐禅なんだと、坐禅という姿を取ると、そういうふうに言うことができるんじゃないかと思えます。基本として本当の自己と現実のこの私との相互参究というのが坐禅であるということがあるんですよね。そこから話が始まるわけなんですけれども、現実的に一般的な相互参究、つまり他者との相互参究が成り立つ地平といいますが、それがどこで成り立つのかという話になるとなると思わんです。現実には他者との相互参究が成り立つための基本条

件があると思う。それが取りも直さず今言った本来の自分との相互参究、これが基本にあつて、そこで他者との相互参究も始めて成り立つてくるということがあるんだと思うんです。結局お互いがそれぞれ本当の自分と向き合っているか、少なくとも向き合おうと努力しているか、そこが大事で、そういう人達の間で始めて他者との相互参究というのも成り立つてくる。逆を言いますと、本来の自分の方へ向いていない、先程言いましたように他の方へ意識が飛んでしまつて本来の自分の方へ向いていない者同士が例えば参究しあう、それも相互参究なんだと、お互い相互に参究しあっているんだから相互参究じゃないかと言われるかも知れないけれど、その一人一人が本来の自己と向き合っていないならば本当の相互参究にはならないということになるんじゃないかと思えます。それでこういうことも考えられるわけですね。AとBという二人が相互参究する場合、Aの方は本来の自己との相互参究（縦の相互参究）をしているとする。Bの方はしていないとする。この二人がお互いに参究しあつた場合、場合によってはそういうことも考えられるわけですね。その時に相互参究は成り立つのかということがあるわけです。それは成

り立たない、厳密に言うとなつたないうことがあつたと思うんです。しかし、じゃあ成り立たないからAとBとの相互のやりとりは何の意味もないかという、それは非常に大きな意味があるわけで、AとBとの出会い・やりとりによつてBが本来の自分との相互参究を始めるきっかけになりうるわけです。そういうことが当然起こってくるわけですね。そしてBが本来の自分に向き合つた時に始めてAとBとの真の相互参究というのが成り立つてくる。お配りした資料を見ていただきたいと思うんですけど、現実の自分と現実の他者との相互参究というのが当然考えられるわけなんですけれども、それが考えられる地平というのは、この現実の自分が本来の自分と向き合っている、正面きつて向き合つて相互参究している。また現実の他者もその本来の他者と縦の相互参究を絶えずしている。そういうことが必要なんだということですね。ここで言う本来の自分と本来の他者というのは一緒です。久松先生が共通の自己と言われているものに当たるわけなんですけれども、そういうお互いがそれぞれに縦の相互参究をしている者同士の間で真の相互参究というのは成り立つてくるだろうというふうに思うわけです。しかしこ

こでパターン1、パターン2というふうに書いたように、どちらかが本来の自己との相互参究をしていない場合というものもあるわけですね。そうなつた時にはどうしても一方通行になつてしまふ。どちらかからどちらかへというふうになつてしまふわけですから、真の相互、お互いにといいことは成り立たないわけです。しかしこの二つのパターンの場合でも、真の意味の相互参究ということは成り立たないけれども、この出会いというのは非常に重要で、これによつて他者、または自分というものが本来のものに気づく、気づかされるといふことが起こってくる。それで本来の自己からの突き上げなり呼びかけというものに目覚めてくる。目覚めるといふことはそこで本来の自分との縦の相互参究が成り立つてくるわけですね。そしてそういう過程を経て真の（双方向の）相互参究ができるようになってくるわけですね。ここまでの私の説明に対して何かご意見がありましたらどうぞ。」

○「あなたは非常にパターンとかね、相互参究ということ型にはめて考えている。そうじゃなくて、以前Sさんの話が出ましたけれど、路地の魚屋さんとか八百屋さんの話に感動する、そ

れも相互参究ですよ。生きてパツと本当の自己が触れ合っている。そんなこと世間にはいっぱいある。それが元じゃないですか。だから自分が本来の自己と相互参究していないという、そんなことないじゃないですか。誰だつてみんな心打たれる時や感動する時がある。そこるところちよつとギャップがあるんじゃないか。有相の自己があつてそれが本来の自己と相互参究するといふ、その視点をちよつと考え直してみたらどうですか。それが西田さんの言う、我あつて経験があるんじゃないかと、経験があつて我があるんだということ。人と会つてハツと心打たれるということ。普通我々が自己という場合に、江尻さんはよく有相の自己と言われるけど、それはイメージだと思ふんですよ。自己という表象ですね。本当の自己じゃない。まったく僕の勝手な解釈ですけどもね、我思うゆえに我ありというのがありますね。これ哲学と関係ないんですよ。この最初の我というのはイメージですよ。我という表象ですよ。思うということの中に我があると、これは経験の中に我がある、それを概念的に整理したら、我思うゆえに我ありというようにならんんじゃないかな。最初の我というのはとにかく抜け殻みたいな概念という

か、表象というか、自己の表象です。

だからあなたは有相の自己が本来の自己から突き上げられると言うけれども、最初から有相の自己を設定している。それがもう既に表象じゃないですか。生きた自己というのは先程HRさんが言っていたが、畑をやっていたらパツと気づいたというようなことじゃないか。もっと相互の触れ合いというのが相互参究だというふうに広く考えないと、坐禅をどうのこうのじゃなしにね。久松先生が言っておられるのはそこじゃないですか。世界中いつでもどこでも誰でも相互参究しているんだということでしょう。」

江尻「先程他者との相互参究を通して、何かに寄りかかっている自分に気づかされる、はつきりさせられるという人がいるという話をしましたよね。結局人間は自分が何者かである、何かであるという在り方をしてるわけでしょう。みんな何かしら自分というものを持っていてから苦しいわけでしょう。自分が今苦しむというのは何か自分という形を持って生きてるから苦しみを持っているんじゃないですか。元からそんなものはないんだ、本来ないものなんだ、表象に過ぎないんだ、有相の自己なんてないんだと言っていたら

…」

〇〇「そうじゃなくてね、苦しいのは自己なんです。自己の苦しみがなくなって、苦しみが自己なんですよ。」

江尻「有相の自己、この現実の自己が自己じゃないと言っておられるわけですか。実際突き上げを受けて苦しんでいる私がいるわけですよ。少なくとも僕は苦しんでいます。」

〇〇「それがイメージのことが多い。苦しんでいる自己がいるというのはもうイメージだ。苦しみのものはね、あーそれだけ。」

江尻「〇〇さんはイメージじゃない苦しみのものが自分だと言っているわけですか。」

〇〇「経験あって我があるということですよ。」

江尻「苦しみだけであるということと言われているわけですね。」

〇〇「だから坐禅しているでしょう。足が痛くなるでしょう。その時にどうしてもいけなければどうするか、こんなこと考えているのは頭で考えているんですよ。そうじゃなくて本当に坐っていたら痛さだけです。そうなるん

なことを考えているのは頭で考えているんですよ。そうじゃなくて本当に坐っていたら痛さだけです。そうなるん

そこで痛みとともに消え去れど、あなたが言うように突き上げられている。そこだけになりきる。この場合痛みというのは一応突き上げられていると考えたらいいでしょう。足が痛いのも心が痛いのも一緒ですよ。その痛みだけに

なりきる。この痛みを何とかしよう、どうしたらなくなるだろうとそんなことを考えている間は絶対痛みから抜けられないですよ。痛みになりきる、痛みとともに消え去るといって、突き上げられるままに自分を任せてしまうということ、そこで何か一つの転機があるんじゃないか。そうじゃないですか。あなたがしきりに言っていることはそういうことじゃないかと思うんですよ。だから僕はもっと具体的に言っ

てほしいと思う。僕は何回もあなたに言ってきた、経験的に話してほしい。突き上げが来るとかどうとかそんなこと言っている暇はないでしょう。もう痛さだけ、苦しみだけというか、そういうことだと思いませんか。そこで一つの転機が起こってくる。」

江尻「〇〇さんがいつも問題にされている、痛みだけ苦しみだけということ、もうそれだけなんだと言われていますよね、それになりきるんだと。それじゃあどうしてもいけなければどうするかという公案にしても、どうしてもいけないそれだけと言うことになるんじゃないですか。」

〇〇「どうしてもいけないんじゃないわけですよ。」

江尻「どうしてもいけないわけじゃないんですか。」

〇〇「そこに一種の自己がある。経験あって我があるとかね、むしろそれが純粹経験で本当の自己に近いでしょうね。みんなそういう経験をもっているわけですよ。それを自覚するかしんないかの差だけであってね。どうしてもいけないうのは、どうするか、どうしようどうしようと思ってるからどうしてもいけないうと感ずるわけでしょう。追い詰められたらどうしてもいけないなんて言っている暇もない。」

HR「他者というのは育ちも違うし経験も違うしものの考え方も違うし、一つのものを見てもそっちから見るのとこっちから見るのと違う。一方が明るければ一方は暗い。だからピタッと一

つになることはあり得ないと思う。」

OC「HRさんは自分と他人とは違うというそこを出発点にしているでしょう。それをひっくり返せと言うわけですよ。共通点があるから違うというところがあつたわけだから、共通点を出発点とするといいことです。」

HR「それじゃあ二人の共通点はどうなんですか。言い合いをしているだけじゃないですか。OCさんと江尻さんとの共通点をうまく出してほしいわけです。」

OC「今こうして話し合っている。そして通じている。言い合いができるということが共通点でしょう。共通点があるから言い合いができるわけですね。それがなかったらできないでしょう。それが経験ですよ。共通点があるから違いがあるということが分かるわけですよ。その中でお互いに帰るといふこと。意志前意志前と言うけれどね、そこをみんな通っている。」

HR「意志前に行けということでしょう。」

OC「みんな自分という人間がコント

ロールできると、意志の自由というよなことを言いますよね。それが自由だと言うけれど、そんなこととんでもない。自分の意志をコントロールできますか。」

HR「そこで意志前の状態とはどういうことかということに問題を集中しないとだめじゃないか。意志前の状態とはどういうことですか。」

OC「それはややこしいけれど、分かりやすく言うと、例えば男というのはミニスカートの女性を見ると刺激を受けて欲求が起きるでしょう。欲求が起きるといふことは意志の活動ですよ。そして精神的にも緊張するし肉体的にも緊張するわけです。そこには目標があるわけですからね。しかし目標がなくなつたらそういう思いも消えてしまふでしょう。そこが意志前ですよ。欲求前ですよ。そうかと思つたら向こうから酒のにおいがしてきた。ああ飲みたいと思う。そこでまた酒が飲みたいたいという欲求が起る。意志が出たり入つたりする元が意志前。欲求というのは意志活動なわけです。理性に近い意志というのは哲学の伝統なんですよ。プラトンとかアリストテレスとか、あるいはデカルトとかね。だけど

そうじゃなしに、少なくとも西田さんや久松さんが言っているのはもつとプラグマティズムに近い心理学ですね。意志というのはいろんな意味があるんですよ。」

HR「それで大体分かりました。意志前というのは欲求が出たり入つたりする元だということですね。それで今言われている有相の自己と無相の自己のことですが、江尻さんがこうやってパターンで説明することに対して、そうじゃなしにもつと直感的な、痛いと感じるそのところで捉えようとするOCさんの言い方があるわけですね。江尻さんのパターンでわけて分かりやすく説明しようとするやり方とOCさんの直感的に捉えるやり方との言い合いをしているわけでしょう。」

OC「そうじゃないんですよ。」

HR「僕はそういうふうな受け取っている。」

OC「相互参究というのはその人同士の本当の自己と本当の自己の触れ合いというのかな、ギリギリのところでは触れ合うという、それが大事というかな、参究とは本来そういうものなんですよ

ね。そうじゃない場合もあるけれども、広い意味では全部相互参究、だけど狭い意味で言うところのそういうことになるわけですね。」

OC「私が思いますのは、人間はどんな状態になつても、どんな状態にあらうが、人間というのはこれが自分だと思つているんだ。常にこれが自分だと思つていますよね。これが自分だという思いの中に生きています。そしてそのことに対して他人からとかよく言われたいら傷ついて苦しむ。苦しむということを通さない限りは根源的なものなんか見えないわけですよ。意志前の状態に一瞬なつたとしてもすぐ次はこれが自分だと、これだけが自分だと思つようになつて産み付けられていますからね。自分があり他があるわけですよ。他が自分を傷つける。否定されたら悩むわけですよ。悩むということが本当の自分との接点。江尻さんの話で言つたら、他人があつて否定されて悩み尽くして縦の関係に入つていく、そういうことがない限りは相互参究なんて成り立たないし私は思つている。だから他人があつて自分があつて相互参究がなければだめですよ。パターン1か2かそれは分からないけれど、少なくとも他人があつて自分があつて、そしてそれ

は否定されるだけじゃない、おだてられて喜ぶ場合もあるかも知れない。少なくともこの自分が浮き上がった時に今度は自分が自分で行き詰まり悩むんだ。自然に自分が自分で縦の方向に向かわざるを得ない。ここに本当の意味の相互参究がある。私はそう思っていますけれどもね。それが人間存在でしょう。」

〇〇「自他自他と言っている間はね、歴史の進むべき方向は出ないと思うんですよ。現実にして幸福なる世界を建設しましょうなんて、そんな方向性は出ない。〇〇さんは苦しみて言うけれど、苦しみの中からパッとそれが抜ける時があるでしょう。苦しみばかり見ないで、苦しい世界と抜けた世界とどちらが本当なんだと考えた場合に、抜けたところが本当であってね。」

〇〇「だから私が言っているのはそういう苦しみがない限り抜けたところは来ないということを言っているんです。」

〇〇「それはそれでいいよ。」

〇〇「苦しみがあつて抜けたところというのは、この森羅万象あらゆるもの

違つたものとして生きていると、相互に生きていくということがなんと素晴らしいことかと、この現実がね。この森羅万象いろんなものが成り立つて自分と違う、全然違つてこれこそが俺だと思つて生きていくそのことがね、なんと素晴らしいことか、有り難いことかという世界からの話でしょう。そういう森羅万象あらゆるもの、醜いものから美しいものまですべてのものが個々としてある。そのことの喜びです。全人類の幸福ということはそこ

でしか成り立つてこないじゃないですか。そのことを私は言っている。だから少なくともものんべんだらりんの水の世界じゃないわけです。水の世界であつて個々の世界。まったく一人一人が波としてある。このことのすばらしさが見えるわけでしょう。」

〇〇「あなたは水の世界が波の世界とは別だと言つておられる。水と波とは一つでしょう。直下とはそういうことでしょう。波が水なんでしょう。水が波なんでしょう。」

〇〇「だからね私は少なくとも波がどこかにあつて、これが波だというふうな思いは全然ないですよ。波だから水だと思つている。そこがないと水の

世界は本当は見えないんじゃないですか。私はそう思っているんです。波だから水。個々に区分されバラバラに生きていく、まったく違うものとして生きていく。だから一

風信第47号

2002年12月

FAS協会

△事務局▽

6033-8486

京都市北区衣笠赤坂町一二一普門軒内

[http://www.ne.jp/asahi/fas/soc/
index.html](http://www.ne.jp/asahi/fas/soc/index.html)